東坡居士のことども

本田成之

支那で黨派の爭ひは既に戰國時代、楊朱と墨翟、又は儒墨の是非から起つて居るが是等は學說上の爭ひであつた。前後漢の今文、古文の爭ひは稍政治的意味も加はつたが尙君子の爭ひであつた。後漢の黨錮に至つては宦官小人どもと在野の志士との、全く政黨的鬪爭で其結果は在野の志士の悲慘なる敗滅に終つたのである。宋の朋黨論、殊に王安石及び其徒蔡京、童貫等が其反對黨に加へた彈壓に至つては所謂獸死せんとして音を擇ばざる者であつた。東坡は其壓迫の爲殆んど一生涯窮苦を嘗めた。怕るべきは此黨爭的心癘である。溫厚を以て人氣を得た司馬光でさへ其黨派的爭ひに至ると案外小人的態度に出でゝ居る。道學者程伊川に至つても其態度は人を疑はしめる者があつた。然るに斯かる黨派に或は捲き込まれ或は壓迫されても常に宏大公明の態度に出で天空海濶の氣象を失はなかつたのは東坡居士蘇軾であつた。夫の極度の彈壓を加へた當の反對黨も東坡の人物文學に至つては嘆賞せざるを得なかつた。洛黨の程伊川に屬する朱子の如きは蜀黨の領袖たる東坡に對して學派としては敵意を表すべきであつたが、流石に朱子だけあつて折に觸れて東坡を憬望して居る

所が現れて居る。寶玉は誰が見ても價値があるのであらう。從つて東坡が貶謫せられ遂に其死を見るに至つた後、卽ち南宋から元明淸に至るまで(日本では鎌倉以後禪林に由つて傳へられた)東坡居士は實にすばらしい憧憬の對象として支那、日本、朝鮮までも其遺芳を傳へたものである。其れが道學者のやうな兀傲で一種の臭味のある者ではなくて、風流洒脫、何人にも親しみがあり、而も飽く迄超脫した所のものである。東坡笠、東坡羮なども其一端である。

東坡を我國へ紹介したのは余の知る範圍では鎌倉時代の哲人道元禪師が始まりであらうと思ふ。

大宋國ニ東坡居士蘇軾トテアリシハ字ハ子瞻トイフ。筆海ノ眞龍ナリヌベシ。佛海ノ龍象ヲ學ス。重淵ニモ亦游泳ス。層雲ニモ亦昇降ス。アルトキ廬山ニ抵リシ因ミニ溪水ノ夜流スル聲ヲ聞クニ悟道ス。偈ラツクリテ常聰禪師ニ呈スルニ曰ク、谿聲便是廣長舌。山色豈非淸淨身。夜來八萬四千偈。他日如何擧ニ似人一。コノ偈ヲ聰禪師ニ呈スルニ聰禪師然之ス。聰ハ照覺常聰禪ナリ。聰ハ黃龍慧南禪師ノ法嗣ナリ。南ハ慈明楚圓禪師ノ法嗣ナリ。」居士アルトキ佛印禪師了元和尙ト相見スルニ佛印授クルニ法衣佛戒等ヲ以テス。居士ツネニ法衣ヲ搭シテ修道シキ。居士佛印ニ獻ツルニ無價ノ玉帶ヲ以テス。時ノ人曰ク凡俗所及ノ儀ニアラズト。云々。正法眼藏谿聲山色

東坡と佛印との逸話も有名なものである。道學諸先生の佛學は孰れも不徹底であり、從つて終に匙

を投げた。しかし又、淺近な所を剽竊し、耳を掩ふて鈴を盜む式で、表面は頻りに佛老の害を高唱した所寧ろ憫笑に値する者であるが東坡に至つては晴天白日に佛を學び又佛理を能く證悟したものである。例へば觀音經に「呪咀諸毒藥、所レ欲レ害レ身者、念二彼觀音力一、還著二於本人一」とあるのを評して觀音は慈悲者である。今呪咀に遭つた者が觀音の力を念じたので還つて本人を逆襲すると云ふのは觀音の心ではなからう。今之を改めて「呪咀諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、兩家摠沒事」とすべきであると云つて居るのは面白い。東坡志林

又或時蘇佛兒と云ふ野菜賣の老人が東坡を訪れた。年は八十二で酒を飲まず肉を食はず、兩目爛然、童子のやうである。自ら言ふ十二歳で齊居修行、妻子なく、兄弟は自分と共に三人あるが皆持戒念道して居る。長は九十二、次は九十、與に死生の理に達して居る。此二人は合浦の東南六七里に住んで居る。佛兒は野菜を賣りながら東坡に行き老人連に向つて「卽心是佛は肉を斷つのではない」と云つた。東坡は勿論食肉贊成の方であつたが併し注意して「勿レ作二此念一、衆人難レ感易レ流」と。老人連は大に喜んで「如是如是」と云つたと。同上これは東坡が如何に佛理を解し又好意を持つて居たかゞ分る。斯う云ふ點は清朝の魏源、龔自珍、愈樾などゝ同一である。

程伊川や朱子は天性小乘的の人間であるが程明道や蘇東坡は天性大乘的で、殊に東坡は天性禪を會する底の人物である。其れは其政治的手腕に至つても同一である。佛敎に至つては禪に限らず、

孰れも理解を持つて居たと思はれる。殊に余は其阿彌陀佛頌を興味ある者と思ふ。「錢格の圓照律師、善く道俗を勸めて、西方極樂世界阿彌陀佛に歸命せしめようとして居る。眉山の蘇軾は敬んで亡母の遺留した簪珥を捨し、工に命じて佛像を采畫せしめ、父母の冥福を薦め、謹み再拜稽首して頌を獻ずる」と叙して

佛以二大圓覺一。充二滿河沙界一。我以二顚倒想一。出二沒生死中一。云何以二一念一。得レ往二生淨土一。我造無始業。本從二一念一生。既從二一念一生。還從二一念一滅。生滅滅盡處。則我與レ佛同。如レ投二水海中一。如二風中鼓レ橐。雖レ有二大聖智一。亦不レ能二分別一。願我先父母。與二一切衆生一。在處爲二西方一。所レ遇皆極樂。人人無量壽。無往亦無來。東坡全集卷二十

これは小乘大乘通申の說であるばかりでなく禪淨一致の妙理を詠じた者と見てよからうと思はれる。而も佛敎專門家の書き方と違つて所謂「筆海の眞龍」であるだけに高尙な佛理が詩的に表現せられて居り、從つて普遍性を帶ぶのである。

東坡の家は其父母を始め其弟、子由も皆佛敎者で東坡は殊に熱心であつた。其父母の冥福を祈る爲に或は堂塔修膳の發起人になり、又は多く佛菩薩の贊を作り、嶺南に謫居して居たとき一民家から佛畫像を掘り出して洗濯し自ら慓裝して贊をつくりて祀り、後に又子由に贈つたり、又手づから寫經して寺に納めたり、若い時から常に緇徒と往來して能く寺に寢泊りし、而も到る所持囃された

ことからでも分るが、特に前述の常聰、佛印と會して參投したことなどは單に皮相的の佞佛でなかつたことを證明して居る。徽宗の健中靖國元年西紀一一〇〇極暑の七月二十八日嶺南からの歸途常州の客舍で今や息を引き取らうとした。其數日前まで來訪の米元章などゝ談論往復して居たのであつた。豫て其恩顧を受けて居た徑山の長老維琳は錫を飛ばして見舞に來て居たが、愈よ危篤を見て維琳は東坡の耳側へ大聲で

「端明東坡の別號宜レ勿レ忘。」

坡、「西方不レ無、但箇裏著レ力不レ得。」

錢世雄曰なく

「至レ此更須レ著レ力。」

坡、「著力卽差。」

「語遂絶」（年譜）とある。「但箇裏著力不得」と云つたのは恐らく「求心不可得」の意味であらう。錢世雄には其意味が分らなかつたので東坡は更に「著力卽差」と云つた。脫落身心である。高僧の入寂と同一である。時に六十六歲であつた。此短かい問答で特に興味のあるのは維琳が「端明宜勿忘」と云つたことゝ東坡が「西方不レ無……」と答へたことである。坡倉時代に禪宗を傳へた臨濟漕洞二宗は禪の一點帳で西方の話は殆んどない。殊更に反對した形迹もないが寧ろ無用視したやうで

ある。然るに後に同じ臨濟の流れを汲む黄檗隱元は併せて阿彌陀佛をも念ずることを傳へた。今日の支那の佛寺は大抵金剛經と阿彌陀經とを讀み、禪淨一致して居るやうである。東坡の時は勿論北宋であつて徑山は堂々たる禪刹であつた。而して徹悟して居た東坡に向つて西方の事をも忘れるなと云つて居る所は既に此時代禪淨一致の考が叢林の一風潮であつたことが知れるのである。東坡も平素兩方を修めて居る方が安全だと云つて居る。兎に角、東坡は斯かる信念があつたればこそ如何なる逆境に遭つても從容として自得し、常に快活裡に安住して居たのであつた。

東坡に關する逸話の多いことは南宋以後の隨筆、詩話等に彼れに關する話の載つて居ないものは絶無と云つても可い程であるのでも分る。彼れが始め京師に出で禮部の試に應じて「刑賞忠厚論」及び「春秋對義」を作つた時、一代の碩望歐陽修が其主司であつたが此二文を見て驚喜し、梅聖喩に語つて「吾れ此人を避けて一頭地を出さめやう」と云つた。其如何に才氣英發、時群を拔いて居たかゞ分るのである。又時の宰相韓魏公も彼れの遠才大器を豫見し、英宗、神宗、以後歷代の天子も彼れの天才を認めて嘆稱措かざる程であつたが遂に大用することが出來なかつたのは不思議な運命で、天下後世の人をして同情に堪へざらしめる者である。斯かる大才を抱き乍ら毎に不遇の地位に貶されゝば屈原や賈生のやうに疾痛慘怛、慷慨悲憤に出でるのが普通人の徑路であるが東坡に至つては少しも其れがない。其屢詩案やら筆禍に累せられて寃罪を蒙つても一度も其れを自ら辨解し

なかつた。杭州へは二度、英州から惠州と次第に邊地に遣られ最後に瓊州（今の海南島）別駕に貶された。此處は臺灣よりも更に南方に位して生蕃地に等しい所で當時普通人の住める所ではなかつた。醫藥も何も勿論ない。官宅とても無かつたので東坡は地面を買ひ家を築いた。土地の人は甓を運び土を畚して手傳つて呉れた。彼は獨り幼子の過と詩文を作るを樂みとし、時々其父老と交際して居た。その檳榔樹や椰子の間の此蠻地で終焉するつもりであつた。しかし此邊地まで慰めに訪れる者があつた事は如何に東坡が德望家であつたかゞ分る。或人が斯かる不衛生の處では壽命も縮むであらうと云ふと彼れは否、假令京師に居ても短命な者は短命で某々は醫藥に手を盡したに拘らず既に死んだのではないか此地にも長命の者は澤山あると云ひ、人は天命を知ることが必要で、譬へば自分は元來此邊地の秀才で頻りに試驗を受けても及第せず從つて上京も出來ぬと思へば何の不平もなからうと云つて泊然として此處に笑つて居た。

東坡は前には幾度か天顏に咫尺して講書もし詔勅も代作した程の身分であつたが打續く小人共の讒構に由つて邊地に流謫の身となつた。常人ならば昔の榮華を忘れず邊地にあつても矜重を脱することはなかつたらうが東坡は邊地にあれば土人並の粗服を纒ひ、土人と往來談笑して何の隔てもなかつた。或時瓊州にあつて黎子雲を訪れて雨に遇つたので農家へ入つて簑笠（タケカハガサ）を借りて之をかぶり、屐（ボクリ）を穿いて歸つた。婦人や小兒が後から隨つて爭つて笑ふ、邑犬は羣り吠へると云ふ有樣であつ

た。これは「東坡戴笠圖」として能く畫題に載る逸話である。梁谿漫志卷四　又、東坡が斯く邊地に謫せられて居た時には毎日起きて客を招いて談話をするか、又は出かけて往つて人を訪れる。其與に遊ぶ所は少しも階級などを擇ばなかつた。それ〴〵其人の高下に從つて放談高論、何等障壁を設けなかつた。話すことの出來ぬ者には妖怪談でもせよと强いた。其れも無いと云ふと、では出放題を云へと曰つた。世說新語補　これ等は如何に彼れが人懷かしい、所謂人間味の多い人物であつたかゞ分るのである。終日危坐して靜かに大化の流行を觀ずると云ふ道學先生連とは大分趣が違ふではないか。しかしどちらが人間の自然に近いであらう。斯かる心境であつたから任地又は謫所にあつて或は生命を堵して洪水を防いだり、人民の利益と風致を增す爲に蘇堤を作つたり、又假令反對黨の利益になることでも人民の便利の爲には腹藏なく知慧を貸すほどの雅量もあつたのである。彼れは明哲保身的の利己主義とは全く反對であつた。其れが彼れの榮達し得なかつた點で其憧憬せられる點も亦此處にあるのである。

吾人の最も東坡の及び難いと思ふことは左の一事である。建中靖國元年、彼れは赦に遭つて儋耳から北へ歸るとき陽羨といふ所へ卜居した。此地の土大夫は猶嫌疑を畏れて東坡の所へ寄り附かなかつたが獨り士人邵氏瞻が坡に從學した。坡も亦其人を喜んで時々共に散策して長橋を過ぎ山水を訪れるのを樂みとした。邵は彼の爲に一住宅を世話した。五百緡だと云ふ。坡は囊を傾けてやッと

の事で買取ることが出來、愈々何日に引移ると云ふ迄になつた。夜、邵と月光を浴びて一村落に入ると非常に悲しげな婦人の哭聲が聞こえた。東坡は次第に近づいて到頭邵と共に扉を推して其家へ入つた。一老嫗は坡を見て依然として泣いて居る。坡は何故に其んなに哀むかと尋ねた所、嫗が曰ふ、吾百年から持ち傳へた一軒の家があつた。今まで大事にして來たのに吾が子が不肖で遂に他人に賣拂ふことになつて今日此處へ遷つて來たが、百年の舊居を一朝にして訣別するかと思へば心を痛めずに居れぬと云ふことである。東坡も同感に堪へず、して其舊居は何處にあるかと尋ねると、豈計らんや坡が五百緡で買つた其家なのであつた。坡はそこで再三慰撫して徐ろに謂ふには、嫗の賣つた家は實は自分が買つたので其んなに悲しむ必要はない、其家は嫗に還してあげやうと云ふ。そこで嫗の前で其賣約證書を焚き捨て其悴を呼んで翌日母を舊第に還すことを命じた。而して其五百緡の直は取らなかつた。坡は其れから遂に毗陵に還りて最早宅を買はず、顧塘橋の孫氏の家を借りて其處で休んで居る中に其歳七月此借宅で永眠したのである。梁谿漫志四世說新語補二（完）